

「大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成」プロジェクト

インタビューシリーズ第7回：文学部 三野博司先生

文学部長の三野博司先生はフランス文学がご専門。とくにカミュ研究の第一人者でいらっしゃいます。インタビューは最初、1回生に対して「学びとは何か」というテーマで、こんなお話をされた、というところから始まりました。



■ 「先生」に出会う

「大学には先生はいっぱいいると思うかもしれないけれど、制度内の存在である「教員」と「先生」とは違います。先生というのは、自分の知らないある深遠な真理を知っているらしく思われる人で、その人につき従って行くことにより自分が真理に接近することが可能であると思われる人、です。『星の王子さま』で、語り手と王子さまが砂漠で出会いますね。おとなである語り手が、子どもの王子さまからいろんなことを学んで行く。ここでは王子さまのほうが「先生」なのです。その王子さまにはさらに「先生」がいて、それはキツネです。キツネ→王子さま→語り手→読者という順で、知恵やモラルが伝えられて行く。」

「その意味で、「先生」というのは至る所にいる可能性があるのだけれど、先生は決して自ら名乗りはあげません。「私こそがあなたの先生である」と名乗りをあげるのは偽物、ペテン師です。漱石の『こころ』は冒頭、「私はその人を常に先生と呼んでいた。」という句で始まります。語り手は鎌倉の浜辺で出会った男性を、ある日ふと「先生」と呼ぶようになります。それは意識せずに思わず出た言葉なのですね。そういうかたちで「先生」というのは設定されてくる、そういう存在なのです。大学の4年間でそういう「先生」に出会ってください、というのが1回生に最初に伝えたいことです。」

■ ロマネ・コンティを生み出す「場所」

「二つ目は、学びの場所の重要性です。情報を得るだけなら、今はパソコンを立ち上げればどこでもいくらでも入ってくる。そうではなく、学びの場所には特有の空気が流れている、香りがある、雰囲気がある、そういうことが大事なのです。最高級のワイン、ロマネ・コンティができるのは、ブルゴーニュのコンティ村のわずか1.8ヘクタールの小さな畑で取れるブドウだけ

なのでですね。畦道の一つ越えると、もう全然違う。その土壌でしか育たない。それと同じです。私たちは生まれる場所は自分で選べないけれど、青春時代の4年間は、ある程度、自分で選べる。では、どういう場所がいいのか。学びというのは悟りを開くわけではないから、世間から半分くらい切り離されて、半分くらいつながっているのがいい。その点で、奈良という学びの空間は、京都や大阪からちょっと離れていて、それなりの刺激はあって、自然があって伝統と歴史があって、いいんじゃないか、と。卒業生でも、奈良で過ごした4年間で自分を支えている、という人がずいぶんいます。そういう学びの「場所」を大切にしてほしいですね。」

■ 「魂の欲求」としての学び

「シモーヌ・ヴェイユが書き残した『根をもつこと』という書の中で、人間の「魂の欲求」について語っています。学ぶということも、ヴェイユ風に言えば「魂の欲求」なのですね。1回生たちは、親から勉強しろと言われて学んできたと思うけれど、その中でも、魂としての本当の欲求というのがあるはずで、それを大切にしてほしいのです。最初は、人に負けたくないとか、いい点数とりたいとか、就職のためとか、「不純」な動機でもいい。それが、学んで嬉しいとか、新しい発見の喜びといった、純粋な「魂の欲求」を引き出すきっかけになります。」

「学ぶことで、私たちは「世界の新しい見方」を身につけます。大河ドラマの『竜馬伝』で、坂本竜馬が地球儀を見せてもらう場面がありました。そのとき彼は、日本を外から見る「外部の視点」を身につけました。たとえばフランス文学を学ぶことで、身の回りのものの見方、人生に対する考えが変わる。どんな学問だって、そうだと思います。」

■ 「繊細な心」を学ぶ

「では、とりわけ文学部で学ぶというのは、どういうことか。幼い頃、理科系の天才だったパスカルは、長じてパリの社交界に入って人間を観察する。そして——有名な言葉ですが——「幾何学の精神」と「繊細な心」の両方が必要だ、と気づくわけです。幾何学の世界は数値で表わせるような、正解がある世界だけど、繊細な心は、そうではなく、直感的に全体を把握する力だ、とパスカルは言っています。そうでないと人間はわからない。オウム真理教に理科系のエリートがずいぶん入っていて話題になったことがありましたね。彼らは理科系の秀才として育って来て、世界をわかりやすく説明してくれる麻原の粗雑な教説に飛びついてしまった。彼らには幾何学の精神はあったかもしれないけれど、繊細な心が欠けていた。繊細な心は、割り切れない人間の世界、矛盾を矛盾として受け入れる心ですよ。文学部で学ぶというのは、この繊細な心を学ぶということです。」

■ 教養とは「自らバージョンアップする力」

「知識はいくら貯め込んでも賢くはならない。単なる情報の蓄積です。それに対して「知」とは自ら働きかけるものです。そして「教養」とは「自らバージョンアップできる力」だと定義したいと思います。パソコンがそうですよね。どんどんバージョンアップしないとついていけない。科学技術は日進月歩で発展するし、世界はどんどん動いて行く。その中で、他から強制されるのではなく、自ら「知」をバージョンアップできる能力が「教養」だと思います。同様に「学力」というのも、学んだ結果、こんな知識が増えたとか、こんなことができるようになった、ということではない。ましてや各種の「資格」を取得してそれを誇示することではない。学力とは「学ぶ力そのもの」ですね。環境を整えてあげることは大事ですが、いい教師がいるとか、いい教材がある、といったこととは無関係に、どんな状態からでも学べる力、というのが本当の「学力」じゃないかと思うのです。」

■ それでも「先生」は必要なのか？

「そう言うと、それでも「先生」は必要なのか、という話になります。ルネ・ジラルールという哲学者がいて「欲望論」で有名ですが、彼は、人間の欲望は他者の欲望の模倣だ、ということをドストエフスキーやスタンダールの小説の分析を通じて言っています。「先生に出会う」ということは、先生が学ぼうとしている学びの姿勢を模倣することなのですね。自分はこの人を「先生」にしようと思ってついて行く。だけども、その人は深遠な真理など知ってなかったということがわかるかもし

れない。でも、それでもいいんです。その人について行こうとしたことで、自分が学ぼうという姿勢が形成されたなら、それでいいのです、という、最後はオチみたいですけど。」

■ 「教養」か「専門」かは見方の問題

「インタビューの趣旨である教養教育と専門教育については、それは大学という「制度」の中での問いであって、私はまずいったん「制度」を離れて「教養」とは何か、「専門」とは何かを考えてみたいのです。この二つは前後関係でも上下関係でもない。まったく次元の異なる概念なのではないか、と。教養とは何か、という書物はありますが、専門とは何か、という書物はありませんね。「専門」とは一般化できないものに付された名辞だからです。教養とか専門とかは、学問に対する単なる見方の違いに過ぎなくて、一般化できるものとして見れば「教養」になるし、そうでない場合は「専門」になる、ということです。」

「たとえばフランス文学研究は教養なのか専門なのか。見方によります。私は「フランス言語文化史概論」という科目を担当しています。教養科目ではなく専門の導入科目ですが、半数以上は1回生が受講するので、まだフランス語を知らなくてもついて行けるように、一般教養的な科目としてやっています。その授業を受けた仏文の3、4回生が「もう一度あの授業をとりたい」と言うんです。かつてとは全く違う目で見られるのではないか、と。そう言って実際に授業に出る学生もいます。専門の視点で、もう一度講義を聴くわけですね。そういう学び直しの機会を常に保障しておくことが大事なのではないかと思います。学びの階層性とか履修モデルとか、それも必要だろうけれど、むしろそういうものに囚われない自由な履修を保障する必要があると思います。」

■ 「大洋」としての教養、「島」としての専門

「あらためて教養とは何か、という私の考えをまとめると、四つの要素があります。一つは、あらゆる専門の間をつなぐ「共通の知」ということ。専門教育の支えとなり、橋渡しとなる知というのが、教養を構成する一つの要素かなと思います。二つ目は、先に言った「自らバージョンアップする力」。教養があるというのは、自ら学ぶことによって自己変革できる力、未来に向かって開かれた可変性を持っているということだと思います。三つ目は、これも先に言ったことと重なりますが、「学ぶ力そのもの」。優れた教育環境を学生たちに与えることは私たちの使命だけれど、それとは別に、どんな環境からでも学ぶ人は学ぶ。人間がそういう力を持っていることを、私たちは認めておかないといけない。

そして最後は「考える力」を持っていること。パスカルは「人間は考える葦である」と言ったし、デカルトは「我思う、故に我あり」と言ったし、考えるということこそ人間の尊厳であり、存在の保証です。——以上が私の考える「教養」なのですが、総じて言えば、教養というのは大洋のようなもので、専門は、そこに浮かぶ島みたいなものかな。島と島との交通は海があってこそ可能となるので、そういう意味での教養の力を養う必要があると思います。」

■ フランス料理と幕の内弁当

「そこから、あらためて大学という「制度」における「教養教育」と「専門教育」に戻って考えた時、まず言いたいのは、階層性にこだわらない自由な履修形態、3、4回生になって1、2回生の入門の授業もとれる、という自由な履修形態を保障しておく必要性です。学問分野の特性にもよるのですが、前回、文学部を改組してコース制のカリキュラムを組む議論をしていた時に、言語文化学科のカリキュラムは「幕の内弁当」でいい、という話をしたのです。フランス料理は食べる順序が決まっていますね。もっともこれは、大革命後にロシアから入ってきた比較的新しいシステムなのですが。オードブルからデザートまで、順序を違えてはいけないし、皆で一緒に食べて、食べる時間を共有するんですね。それに対して、幕の内弁当はどこから食べてもいい。言語文化のカリキュラムは、それでいいです、いきなりデザートから食べ始める学生がいてもいいんですよ、と。」

「歩いて行く時に地図とかチャートは必要だと思いますが、でも地図のない旅の楽しみだってある。地図を持たずに知らない街を歩いていて、灰色の建物を曲がったらその向こうに青い海が微笑んでいた、とか、そういう発見があるわけです。学ぶというのは未知との遭遇であり、発見の旅なので、迷わないためにある程度の地図は必要でしょうが、あまり細かい地図は要らないのではないかと基本的な思いますね。履修モデルとかカリキュラムマップとかを過度に重視するのは、教育さえも効率主義に侵されているあらわれなのではないかな。地図というのは、回り道しないで早く目的地に行きましょう、ということでしょう。そんなに急いで行くことないんじゃないかな。急いだ結果、福島原発事故を引き起こしているわけですし。」

■ 「化ける」瞬間を「待つ」知恵

『星の王子さま』の第13章に出てくる王様、私はあれが好きです。王様は命令することを自分の仕事としている。「自分が命令すれば森羅万象、すべて宇宙は自分の言うことをきくんだ」と広言している。王子さまは

「じゃあ、夕日を見せてください」と言うんですね。王さまは「命じてやる。しかし、自分の統治の知恵では、それは潮時まで待たないといけない」と言います。「陽が沈むまで待つんだ。その時、お前は私の命令が守られたことがわかるだろう」と。この王さまの知恵ですよ、ものごとには潮時というものがあるから、そのタイミングを待つ知恵。それが今、忘れられているような気がするし、教育の現場でも、そうですよね。」

「成熟とか成長は、時間をかけないといけないし、みんなが同じスピードで成長するわけじゃないし。どこかで飛翔する時があるから、そこまで待たないといけない。飛行機は飛び立つまでは自動車なんですね。あれは前進する力がどどんたまって行って、どこかある瞬間で浮上する力に切り替わる。着実に「量」をため込む持続的な仕事が必要なんだけれど、それがあつ「質」に転化する。化ける瞬間があるのです。それは絶対あるから、そこまで待つ姿勢が教育の現場では必要ではないかと思うのです。」

■ 学びの自由度を保障するためには

——「制度」の設計を考える際に、教養と専門とが前後関係でも上下関係でもない、というお話はとても示唆的だと思いました。極端なアイデアかもしれませんが、或る程度の「前後関係」がある外国語と体育を除いて、一般教養というカテゴリー自体をなくしてしまったらどうでしょうか。その代わり、いつでもどこの学部でも、他学部の概論科目をとりに来られる、というかたちにしてしまえば…。

「それはいいかもしれないな。専門基礎でいいですよ。専門基礎を上手くやれば、専門外の人たち、他学部の人たちにも通ずるものになって行くわけだし。そうすると、担当する人は、それなりのものを持っていないといけない、ということになってくるけど。」

——米国の大学では理系の概論科目は、むしろノーベル賞クラスの権威が担当する、という話を聞きますね。

「それは、だんだん階段を昇って、高みに達して、そこから全てを見渡すことができている人なんですよ。実は入門教育ほどむずかしいものはないと思います。本でも、優れた入門書はその道の第一人者である学者が書いていますしね。」

——シラバスの印刷・配布の形式をめぐる議論でも、全学のシラバスを一覧できることが大事だ、という意見がありましたが、これも同じ発想だと思います。

「私の担当している教養のフランス語の授業に、時々3、4回生が卒業単位とは無関係に出てきていて、あれは

いいですね。奈良女子大学、20年いると学生の気質も変わったけれど、やっぱり一定数、勉強好きな学生がいて、とくに初めて学ぶ語学はまじめに勉強する学生にはおもしろいんです。自分の段階的な成長がはっきりわかるから。フランス語は、今では就職に使うことはほとんどない、その意味では役に立たない言語だけれど、それを学ぶこと自体が楽しい、という学生がわずかでもいてくれるのは奈良女子大学のいいところだと思います。」

——奈良女子大学の学生のまじめさというのが、「魂の欲求」としての学びにつながってくる一方で、有用性に絡めとられて追い詰められてしまう、ということもありますね。

「有用性をめぐる議論は難しいですよ。学生たちだって、家に帰って「そんなことやって何の役に立つの、就職どうするの?」とか言われるでしょうし。そこをこのところを奈良女子大学がどうしていくのか、というのは難しい問題ですね。私はこの大学はガラパゴス諸島でもいいかなと思うのだけれど、他方で競争にさらされている現実がある。機能的分化といいながら、グローバル化された視点での単一物差しによる順位付けがある。ところで、インタビューの趣旨に書かれている教養教育と専門教育の話は、大学院も含めての話ですか?」

——大学院まで含めての話と考えています。ある意味、むしろ大学院でこそ「教養」が必要だと。

「なるほど、私の教養の定義の中の「共通の知」という考え方をすれば、大学院まで含めて考える必要がありますね。」

——その意味での「教養」を欠いたら大学ではあり得ない、と考えているのですが。ただその時、教養教育と専門教育とを実体論的に前後関係や上下関係で捉えてしまうと、その配合の度合いによって研究大学、教養大学とカテゴライズされてしまう傾向があります。そこから何とかして逃れたいのですが。「制度」の話となると、とたんに窮屈になってしましますね。

「今日は文学部長としてインタビューを受けているのでしようけれど、もうおわかりのように私は文学部長として話してはしません。学生に接するひとりの教員として話している。教育というものを「管理の視点」や、「制度の語法」で語りたくない。それが私の基本的姿勢です。そういう人間が文学部長の座にいていいのか、ということはあるのですが。ともあれ、私が大学の管理運営にたずさわるのはこれが最後となるでしょうが、自分の研究生活に戻る前に、文学部長の仕事はそれとして粛々とこなしていかななくてはならない。制度化された教育の中での仕事を果たしていかななくてはならない。しかし他方で、「制度」の中で生きつつ、「制度」から漏れる部分を、どうやって守っていくか、これもつねに考える必要があると思います。」

——何とか「制度」に絡めとられない、やわらかい言葉でこの問題を語る状況を作りたいな、と願っています。

(2011年10月13日 インタビュアー：保田・西村)

全学FD研修会へのお誘い

Faculty 自律の再生への試み ——奈良女子大学での特色ある教育をめざして

来る12月6日(火)に開催される全学FD研修会で、センター員の西村教授と天ヶ瀬准教授が話題提供をいたします。現在進行中の高等教育研究プロジェクトの趣意をあらためてお話しさせていただきつつ、まだ少々気が早いですが、これまでのインタビューシリーズで見えてきたことをご報告して、このプロジェクトが目指す「奈良女子大学の教育課程再編成に向けた議論の基盤形成」の最初の機会とさせていただきたいと考えています。多くの教員の皆さまのご参加を願っております。

日時：12月6日(火) 16時30分～18時
場所：人間文化研究科会議室(大学院F棟5階)

講演：「自前の発想で奈良女子大学を創るために
——Faculty 自律の再生のための試み」
西村拓生教授(文学部)

報告：「奈良女子大学での特色ある教育をめざして
——前期授業見学会から」
天ヶ瀬正博准教授
(文学部・全学FD推進室授業評価部会長)

■ 奈良女子大学教育システム研究開発センターニュースレター19 ■

2011年11月30日発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター204

TEL.: 0742-20-3352

Website: <http://www.nara-wu.ac.jp/crades/>